事例No.	2866
公表年度	R5
団体の属性	都道府県
団体名	岡山県

事例区分	地域活性化

タグ	・移住定住 ・人材確保・育成

事例種類	人材確保・育成

事例内容・タイトル

おかやま創生高校パワーアップ事業

出典

地域づくり人材の養成に関する調査研究会（第5回）

都道府県名	岡山県
事　業　名	おかやま創生高校パワーアップ事業 ※参考：おかやま創生高校パワーアップ事業の後継事業として、高等学校魅力化推進事業を実施している。

概　要

○地域の課題やニーズを踏まえ、おかやま創生を担う人材の育成や地域の活性化に貢献する高校の魅力を図る。（平成 28 年度～平成 30 年度）

○学校及び地域の関係者等からなる組織（地域連携組織）を設置し、地域に貢献する人材の育成とともに、地域資源の活用や地域の課題解決を目指した教育を実施する。

○地域の実態に即した取組みを効果的に進めるため、事業に係る支援業務を岡山大学地域総合研究センターに委託。

創設経緯等

○岡山県内の高校は以前から「地域学（※）」を取り入れているが、徐々に高校の規模縮小が進む中で、更に地域と連携しながら双方の魅力づくりを推進しなければならないという状況下であった。

※「地域学」は私たちの生活の場である「地域」についての理解を深め、地域がどんな問題を抱えているのか、その解決に向け、自分たちに何ができるかを考え、その成果を提言する活動［岡山県立笠岡高等学校 HP より］

（本事業の前身）
「高等学校魅力化プロジェクト支援事業」という名称で、平成 25 年から 3 年間実施。（平成 25 年～平成 28 年）地域と連携を意識した事業。その後継事業として、平成 28 年度から開始。

○岡山県と岡山大学ともに、初めての取り組みであったため、高校にどこまで踏み込んでいくかの判断が難しかった。特に、将来は自走することを目標としているため、岡山大学から学校にあまり踏み込みすぎないように留意した。

事業の特徴

○事業の中で、工業系、電気系の生徒が専門のスキルによって地域課題の解決に取り組む授業がある。地域への愛着の醸成にもつながり、結果として、これまで定員割れしていた学校が定員オーバーする等の効果が出ている。

○地域で貢献活動を行ったり、課題解決に向けた取組み等を行うことで、地域の大人からの評価を得ることにより、自己肯定感、自己有用感が高まり、活動意欲も向上する。

（成果）
地方創生における高校教育の重要性に注目し、高校生に対して知識や技術を付与することのみでなく、地域を担う気持ちと、地域への愛着や誇りを醸成することを従来にも増して重視し、地元への就職や将来のＵターンにつなぐことを強く意識する。
（確認する方法）
・地域連携の更なる推進と地元産業の振興への寄与（ex 社会貢献活動へののべ参加者数）
・グローバル人材育成の推進（ex 実用英語検定の受検者数と合格者数）

・グローカル人材育成の推進（ex 学校自己評価アンケート）
・地域スポーツの振興への寄与（ex 大会への出場チーム数）

○推進校の指定は基本的には都市部に所在しない学校で、地域との連携した教育活動を必要とする学校である。必然的に中山間地域の学校が多い。

○地域が関わることにより、学校の新たな魅力が生まれたり、地域に少しでも活力が出てくること。また地域の大人が関わることにより、学内教育だけでは見られない生徒の成長が見られる。

市区町村との連携等

○地域連携組織を設置し、市町村関係者が参画することにより、市町村が実施する行事等に学校がより積極的に関わることができるようになった。

○高校生には“探究”が求められ、課題を見つけ、解決するプロセスが大事であるが、学校だけの関わりだと限られた範囲でしかできない。市町村は、課題解決学習に協力してほしい。

○たとえ地域課題が小さくとも、そこに含まれる課題は、日本の課題でもあるため、高校生の時に知ることはとても重要。市町村には、地域課題を積極的に高校生に提示してほしい。

受講費等

○受講費や参加費などの対価の徴収はなし。

参加者属性等

○基本的に学校単位で参加するもの。どの学年が参加するか、どの学科にするかは、各学校の判断による。

実施方式等

○　外部委託方式　委託先は、岡山大学地域総合研究センター

（上記委託先を選んだ理由）

岡山大学が平成２８、２９年度に、高校だけでなく、企業や自治体に入り、地域活性化について、様々な政策の助言をしていたことによる。

体制は、大学教授４人と、関係職員で、決して大きな組織ではないが、フットワークが軽く、委託をして効果があった。

県教育委員会だけでは、教育だけをベースにしがちであり、地域や自治体の事情が分からないため、岡山大学が入ることにより、どう地域に入っていけばいいのか、地域側がどのようにアプローチすれば良いのか助言してもらえた。

受講生の反応等

○　事業報告書より要約

参加した生徒に対するアンケート結果から共通する特徴が見られた。

１年生の終了時においては、１年間の「地域学」や先輩の活動に触れ、いかに自分が地域のことを知らないかを自覚する傾向が強い、

２年生は、本格的に「地域学」に取り組み始め、地域課題、あるいは調べ学習、提案づくり、グループ作業を体験。

そして３年生、特に卒業を前にした段階になると、これまでの活動を通じ、地域での活動の達成感、あるいは、活動を通して地域貢献の想いが強まるとの特徴が見られた。

○事業により、地域との繋がりが濃くなったとの声はどの学校からも聞いている。

意義等

○高校卒業までに学校が立地する地域について知り、地域の大人と協働する（関わる）ことにより、地域への愛着が湧くとともに、地域に貢献したい。と思うようになる。そのようになれば、一旦進学等で県外へ出ても、再び戻ってくる、あるいは地域と関わる率が高くなる。

今後の展望

○「高等学校魅力化推進事業」という新たな事業に切り替えて実施を行う。

その他（募集等）

○推進校は県が指定。基本的に都市部ではない学校を選んでいる。さらに、地域との連携を狙っていることから、地域と連携した教育活動を必要としている中山間地域にある学校を選定。

○事業は１期（平成２８～３０年度）に６校、２期（平成３０～令和２年度）に４校で、計１０校を指定。学年の指定はなし。